

## 登校しやすくなるための取組について

### 不登校児童の状況

対象児童は、昨年度 2 学期から不登校になった。家庭における当該児童への関心が薄い様子も見受けられる。また、学校では、表情が硬い状況が続き、少しずつ登校できる日が少なくなり、教室へも入れない状態になった。

### 具体的な取組

#### ○別室での学習指導

算数と理科について、実験も含め個別指導を行い、その後テストもした。現時点で全て満点。学習については、自信をもてるようになってきた。

#### ○学校行事への参加

学習発表会に向けて、図工作品を他の別室登校している児童と仕上げた。図工が得意なので、集中して取り組めた。また、音楽の発表は乗り気にならなかったが、練習の様子を見学したり、別室でカラオケソフトで練習したりすることで、保護者鑑賞日にクラスに入って 1 曲歌うことができた。

#### ○別室内での人間関係づくり

学習や会話だけでなく、当該児童の得意分野を発揮できるボードゲームを適宜取り入れ、校内別室指導支援員や他の利用児童との交流を図った。また、利用児童のうち最年長であるため、下級生たちの面倒を見てもらい、上級生としての役割を感じられるようにした。



#### ○自己決定を促す関わり方の工夫

会話の中で自己決定を促すようにし、行事への参加や学習内容を決めるようにした。当該児童ががんばりすぎたと支援員が思った時は、次のステップに直ちに進むのではなく、当該児童の意思を確認しつつ、安定した状況になってから次のステップを目指した。

### 成果

校内別室指導支援員が配置されてから、欠席はほぼない。朝は遅いことはあるが、早い時間から登校する日が増えた。表情が別人のように豊かになり、よく話し、体も動かすようになった。教室にはなかなか入れないが、社会科見学・学習発表会に参加することができた。

### 課題

教室に入れない原因を解明し、その対応策を明らかにして、それを教職員で共有していくことが課題である。

## 在籍学級に入れるようにするための支援について

### 不登校児童の状況

対象児童は水曜日以外のほぼ毎日登校し、別室で過ごしている。登校時刻は他の児童とほとんど変わらず、他の児童とは反対の門から登校するようにして、当該児童に配慮している。朝は8時半頃に登校し、給食を食べ終わるまで学校の別室で過ごすことが多い。給食後、迎えに来た保護者と一緒に下校している。

### 具体的な取組

#### ○一日の計画の確認

朝、登校した時に、校内別室指導支援員、特別支援教室専門員、登校支援員、担任等と教室で授業を受ける時間、オンラインで取り組む時間、校内別室で課題に取り組む時間など一日のスケジュールの確認をしている。できる限り授業に参加できるよう、声かけを行っている。

#### ○校内別室での支援

校内別室で過ごすとき、校内別室支援員は児童の話を聞き、何に取り組むかを相談しながらその都度決めている。児童の意見だけでなく、担任や保護者の要望についても話し合っている。また、教室での授業に参加できる回数が増えるよう、担任と協力して支援を行っている。

#### ○学級の児童とのかかわり

休み時間や給食の時間を中心に、校内別室を使用している児童が、学級の児童と関われる時間を設けている。

給食は在籍学級の児童が校内別室まで運び、そこで一緒に話をしながら食べている。



#### ○保護者への支援

担任、校内別室指導支援員、特別支援教室専門員、登校支援員等が、学校で過ごした様子を電話や手紙等で伝え、次の日の過ごし方や、今後の支援の方法について保護者と話し合いをし、検討している。その際、保護者の悩みや思いについて話し合い、保護者への支援も行っている。

### 成果

- ・学校での居場所として校内別室があることで登校する日が増えた。
- ・一日の中で、教室で授業を受ける時間が増えた。
- ・別室でのリモート授業の時間が長くなった。
- ・週1日、午後まで学校にいられるようになった。
- ・行事にも少しずつ参加ができるようになった。

### 課題

- ・卒業を目前にして、校内別室で取り組んだことや学んだことを中学校へどのようにつなげていくこと。
- ・学習の遅れへの対応。

## 「安心」して登校できる校内別室づくり

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、家庭環境の変化により小学校から不登校傾向にあった。中学校3年生になり、進路のことを考えたことをきっかけに学校や学習に興味をもつようになった。校内別室で静かに学習に取り組み、教員や校内別室指導支援員、他生徒と交流しながら自分のペースで登校している。

### 具体的な取組

#### ○校内別室の設置場所

校舎から離れた場所に校内別室を設置し、人目につかずに登校できるようにした。毎日 8:20 から開室し、校内別室支援員が常駐し生徒がいつ登校しても対応できるようにしている。



#### ○確実な情報共有

校内別室指導支援員が報告書に生徒の様子を記録し、個別ファイルに保管している。教員や別室支援員間で情報共有が確実に行われ、生徒対応に役立っている。

#### ○心身のリフレッシュ

心身のリフレッシュを目的に体育館でバドミントン等の運動を不定期に実施し、教員、校内別室支援員も一緒に生徒と活動して、関係を構築している。

#### ○きめ細かい対応

校内別室利用生徒の欠席が続いた際、教員やSSW、校内別室支援員で家庭訪問をしている。生徒に声をかけ、学校とのつながりが切れないようにしている。

### 成果

当該生徒と学校の間につながりが増え、生徒に安心感をもてるようになった。また、当該生徒について様々な視点での支援案が検討されるようになった。

### 課題

校内別室指導支援員を含めた教職員が当該生徒の支援方針について更に検討していくこと。

## 校内別室の活用について



### 不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校6年生の半ばから不登校となった。中学校入学後も登校できず、担任が校内における別室登校の情報を提供したところ、生徒の別室登校への意欲が湧き、4月半ばから週1日の登校が始まった。環境に慣れ、給食を別室で食べることや校外学習に参加することができ、ほぼ毎日別室登校できている。

### 具体的な取組

#### ○学習に対する支援

校内別室指導支援員を毎日配置し、学級担任等との連携体制を構築している。

生徒が用意した教材を自学自習やオンライン授業で取り組めるようにしている。

支援員は元教員を配置し、生徒理解に基づく支援体制を構築している。

#### ○クラスとの関わり

校外学習（10月）の参加に向けた取組として、仲の良い同級生と別室にて交流を図った。

校外学習の事前指導の内容を担任が情報提供し、適切に準備ができるよう配慮した。

放課後に班会議を行うなどの工夫で交流時間の調整を行った。

#### ○給食に対する支援

当該生徒の不登校の要因が小学校での給食後の嘔吐によるものであった。

支援員と担任が連携し、喫食に当たり、当該生徒を配慮した声かけを行っている。

給食は、仲の良い同級生に運んでもらうなど、生徒間交流も含め慎重に行っている。

#### ○家庭との関わり

本校での生徒の様子や家庭での様子を、学年・担任・支援員・保護者で共有し、個別最適な関わり方を日々検討した。

### 成果

1学期当初は週1日の登校であったが、生徒間との交流や、校外学習への参加を経て、現在は、ほぼ毎日別室登校できるようになった。給食に対しても苦手意識を克服しようと挑戦する意識が生まれ、何度か学校で食べることができた。

### 課題

- ・学習に対する遅れ
- ・教室への復帰
- ・給食に対しての課題克服
- ・交友関係

## 不登校生徒支援マニュアルによる支援の充実

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 3 年生であり、中学校 2 年生のクラス替えで、他クラスに親しい友人がいるものの、新しい人間関係になじむことができず不登校になっていった。全く登校しなくなり、クラスに親しい人がいないことが理由であった。保護者からも、友人を作るのが苦手なので、友達づくりを支援してほしいとの相談を受けていた。

### 具体的な取組

#### ○気になる生徒リストへの記載

当該生徒が休み始めたため、担任の見取り等を記載の上、リストにアップし、校内支援会議での組織的な支援を開始した。

#### <記載事項>

欠席の状況、成績、家庭状況、学習・行動観察シートの状況、担任見取り、S C や S S W の意見、関係機関等

#### ○マニュアルによる支援レベルの決定

当該生徒の状況を踏まえ、マニュアルのフローチャートに従い、I C T による授業支援や校内別室での支援を開始した。



#### ○きめの細かいアセスメント

校内別室での支援開始後も、校内別室指導支援員や専門家等による情報の把握ときめの細かいアセスメントを継続し、毎週の会議で支援内容の進捗を図った。

#### <収集情報>

睡眠時間、食事、校内別室指導員日誌、友人、家庭の状況、本人の願い等

#### ○別室における個に応じた指導

生活のきまりの緩和と授業時間の過ごし方等の基本的ルールの徹底、個別ブースからオープンスペースへと段階的な指導、卓球スペースでの運動やカードゲームなど、他者との関わりで学ぶ、コミュニケーション力の向上の支援などを行っている。

### 成果

校内別室へは、毎日登校できるようになった。  
学習面でも、粘り強く、オンラインで授業に参加し、定期テストや提出物の提出にも励んでいる。  
校内別室で人間関係を構築して、新しい進路先に胸を膨らませている。

### 課題

生徒の小さな変化に気付き、共有できるような校内体制を整備する。

## 生徒の未来へつなげる校内別室の活用について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の 2 学期後半から学業不振から体調不良が続いて欠席が増えた。医療機関で診てもらうが体調不良の原因は不明である。部活動などには参加できるが、授業等は安心して学べる校内別室で受けることにした。

現在は、学年や学校行事に参加ができ、場合によっては教室にも入って活動している。

### 具体的な取組

#### ○個に合わせた支援

オンラインで授業を配信して本人が希望する教科、授業、活動を自宅で視聴するように支援する。

部活動、学年行事、学校行事など本人が参加して取り組める活動を支援する。

校内別室で自分ができる学習へ取り組むことを支援する。

#### ○保護者との連携

体調不良の原因をはっきりさせるために医療機関を受診し、その結果から今後の方向性、支援方法を共有する。

保護者が前向きに考えることができるように担任も学年も寄り添っていく。

学校だけではなく、関係機関（SC、SSW等）との連携も助言する。

#### ○支援委員会の実施

週 1 回実施し、それぞれの生徒の状況や支援方法を共有する。その情報を学校全体で共有する。また、いつでも確認できるようにデータ化している。

今後の支援方法について SC や SSW など専門的な見地から意見をもらい決定していく。

#### ○組織的な対応

学校、学年で情報を共有して担任だけが抱えるのではなく学年、学校として対応できるように役割、支援方法を明確にしていく。



### 成果

当該生徒の本年度の欠席日数は、前年度に比べて 51 日減少した。

校内別室で過ごす時間が多いが、教室での活動も増えてきている。

### 課題

当該生徒や保護者が望んでいる「教室への復帰」を実現するための支援方法を充実させること。

## 校内別室指導支援員による支援について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は小学校から不登校状態が続いていた。ADHDや場面緘黙の可能性があったが、WISCの結果は高く、中学校では通常の学級に入学した。姉も不登校だったが、校内別室指導支援員の働きかけにより別室に居場所ができたという経緯もあり、同じような支援を望んだ。

### 具体的な取組

#### ○見守り

当該生徒は良好な人間関係を築くのが苦手なため、別室に慣れるまでは、遠くから職員が見守った。ここでは支援員は顔をお互い覚える程度である。言葉かけに気を付けないと生徒も保護者も不安になることが多い。

#### ○保護者へのアプローチ

当該生徒は、学校に対して不信感や不満感があるので、時間をかけて継続的に面談を行う。支援員と一緒に話を聞くとともに、担任と情報共有をすることもあ

#### ○終日開室

当該生徒が教室には入れるときと入れないときがどういう状態なのか把握し、ニーズに応えるため別室を終日開室することにした。当該生徒は実技教科になると緘黙状態になるため、一人では参加できない。支援員が付き添って授業に参加した。

#### ○個別の支援

校内委員会で一人一人の支援計画を立て、支援を開始している。当該生徒は、4月は別室から他の教室にも移動できず、小学校より教室移動が苦手のため不安になることが多かったが、今は支援について、全職員が理解しているため付き添いなどの対応ができてい



### 成果

支援員が常時いることにより、当該生徒の状況に応じた一時利用ができる。一時利用の間に保護者と担任、管理職で面談ができた。次第に当該生徒は、自分で別室に来られるようになった。長く時間がかかるが、支援の成果である。

### 課題

場所や時間を選ばず、幅広い支援と校内委員会等での共通理解が今後の課題である。支援員が変わることで、生徒と保護者が不在にならないようにする。

## 校内別室指導支援員を活用した取組について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、人間関係の構築が苦手で、欠席が目立ち始めたが、約 8 か月の校内別室での指導を経て、教室復帰ができるようになった。

### 具体的な取組

#### ○基本的生活習慣の確立

「睡眠・朝食管理表」を毎日、支援員とともに記入した。食事・睡眠・学習・ゲーム等について振り返り、改善目標を生徒自身が考えるようにした。

睡眠・朝食管理表		氏名		学年		性別		不登校期間		指導員	
日	時間	起床時間	朝食時間	学習時間	ゲーム時間	睡眠時間	起床時間	朝食時間	学習時間	ゲーム時間	睡眠時間
1	起床時間										
1	起床時間										
1	起床時間										
1	起床時間										
1	起床時間										
1	起床時間										

#### ○学習習慣の定着

- 生活状況、家庭環境、家族関係（キーパーソンの有無）などの問題点を整理し、自分にできることと家族がすべきことを明確にした。保護者に対して家庭環境改善などの提案を行った。
- 家庭での学習のポイント、学習方法、学習時間についての指導を行った。

#### ○学力向上

- 自分で勉強したいものを決めて、1冊のワークを中心に学習した。
- アウトプットに重点を置いて指導した。何かを読むときは全て音読するようにし、答えを確認するときも音読したり、自分で調べたりもした。
- 授業で使っているプリントなどを定期的に見直したり取り組んだりして、教室での学習を把握できるようにした。
- 英語検定（4級）に挑戦し、合格した。

#### ○自己有用感の醸成

- 目標達成ノートを活用して「メンタル・スキル、健康、生活」のバランスが認識できるようにした。
- 学校と家庭で実践する奉仕活動を決めて実行できるようにした。  
例：学校…下校時に校内別室の清掃  
家庭…洗面台の鏡清掃

### 成果

- 約 8 か月間の別室登校を経て、教室に戻ることができた。
- 別室登校時は 2 か月をかけて給食を一人で食べるようになり、さらにその 2 か月後、支援員と一緒に食べられるようになった。
- 生活改善を行ったことにより、小 5 から増加しなかった体重が増加した。

### 課題

生活リズム改善、メンタルトレーニング、学力向上などは、マンツーマンで対応する必要があるが、生活リズム改善には詳細な聞き取りと対応に多くの時間を有するので、一人の支援員で複数生徒の対応する場合、時間と場所が足りなくなる。

## 校内別室指導支援員との連携による支援について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校2年生である。夏休み前から集団の中にいると皆が自分を見ているのではという緊張感が強まっていった。教室にいづらさを感じ、学校を休む機会も増えた。少人数の環境で過ごせる校内別室であれば登校できるかもしれないという意向があったため、校内別室指導において、本校の「4つの柱」による支援対策を実施した。

### 具体的な取組

#### ○学習のサポート（学習支援）

当該生徒が休んでいた期間の授業の内容を一緒に復習したり、小学校の内容を学習したりして、学習の遅れを取り戻す学習支援を行っている。



#### ○授業のサポート（復帰支援）

校内別室に登校している生徒が、教室で行われている授業に参加する際、校内別室指導支援員と一緒に参加して生徒の不安感を和らげる復帰支援を行っている。

#### ○スキルトレーニングのサポート（自立支援）

コミュニケーションスキルやソーシャルスキルを身に付けるために、個別の指導だけでなく小集団での指導を行っている。生徒の自己肯定感を高める、自立支援を行っている。



#### ○給食のサポート（生活支援）

多くの生徒がいるため教室で給食を食べることに抵抗感を抱いている生徒に対して、校内別室で、校内別室指導支援員と一緒に学校給食を食べる生活支援を行っている。

### 成果

昨年度から、校内別室の設備や教材を充実させた。また、校内別室指導支援員との連携も丁寧に図り、情報の共有や対応についての検討をすることができている。そのため、複数の生徒が登校復帰や教室復帰をすることができた。

### 課題

生徒の現状に対するアプローチは充実しているため、今後は将来を見据えた進路指導も充実していく。

## 本校における校内別室での指導について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、2学期から休みがちになり、登校しても別室で過ごす時間が増える。学力不振により、夏休みの宿題が終わっていない、人間関係のトラブル、複雑な家庭環境など、複数の原因が想定されたため、期間限定で教室と校内別室の併用を提案し登校することを優先した。現在も別室登校をしているが、教室で過ごす時間が増えつつある。

### 具体的な取組

#### ○当該生徒の家庭との連携

家庭環境について、担任や学年主任が丁寧に聞き取り、当該生徒の困り感や不安感を受け止めた。当該生徒の了承を得た上で、児童相談所やSSWと連携し、相談できる教職員や場所を増やしたり、生徒に寄り添いながら中立的な立場で家庭に協力してもらったりしている。

#### ○安心できる居場所になる校内別室

校内別室指導支援員が、積極的に話しかけたり、生徒が描いた絵を褒めたりして、学校での居場所をつかった。



#### ○別室支援員と副校長、担任の連携

校内別室指導支援員が当該生徒と相談し、翌日の教室で過ごす時間の計画を立てている。決まった予定を付箋にメモし、記録簿とともに副校長に提出する。副校長が担任に付箋を渡す。担任は、登校した生徒と一日の流れを確認する。以上のように、担任が一日1回は生徒と会話する習慣を確立することができた。

#### ○別室指導に関わる教職員の配慮

担任や学年の教員、副校長も別室に赴き、登校を歓迎していることが伝わるように声をかけ、別室指導に関わる教職員との信頼関係を高めている。

校内別室指導記録		令和 年 月 日 ( )	
時間	不登校生徒 (学年・組)	指導員	副校長
10:00～11:00			
記録・申し送り等			

### 成果

欠席日数が減り、表情が明るくなった。

当該生徒・保護者の認識がずれるという場面が減り、保護者と連携が取りやすくなった。

また、教室で過ごす時間が増え、学校行事にも参加できている。

### 課題

学習に関しては、無気力な状態が続いている。定期考査等は、体調不良を理由に欠席してしまうため、学習支援が課題である。

## 「振り返りシート」の活用などについて



### 不登校生徒の状況

対象生徒は入学当初、小学校に引き続いて家から出られない状態で全く登校できていなかった。保護者とも連絡が取りづらい状況だった。SSWの支援をきっかけに別室登校を始めることができ、毎日別室で自学自習を続け、一部の授業は教室で受けることもできるようになった。

### 具体的な取組

#### ○別室に登校しやすい雰囲気づくり

校内別室指導支援員が教育実習経験者のため、当該生徒との関係性を生かし、当該生徒に声をかけるなどして、当該生徒が入室しやすい雰囲気を作っている。教員志望であるので、生徒からの学習の質問に答えるなど、できる範囲での学習支援を行っている。

#### ○振り返りシートの活用

「振り返りシート」を作成し、活用している。「今日の気分」「本日の目標（過ごし方）」「活動の記録」「先生に伝えたいこと」などを別室登校の度に毎回記入をし、担任等が別室での活動の様子を把握して、支援に生かしている。

#### ○別室の担当教員と支援員の連携

校内別室指導支援員が在室時も含めて、別室の担当教員を毎時間割り振っている。担当教員が別室に出向き、生徒の活動を確認し、校内別室指導支援員と情報交換を行っている。

#### ○チャット機能を活用した全教職員の情報共有

校内別室に生徒が入室した時間、給食希望の有無、予定の下校時刻などの情報について、校内別室指導支援員を通して別室担当教員から、全教職員にチャット機能を活用して、情報共有をするようにしている。

### 成果

校内別室指導支援員の学習支援や声かけによって、利用生徒の不安が取り除かれ、別室への安定した登校が継続でき、別室登校ができる生徒が増加した。

校内別室指導支援員がいることで、生徒が落ち着いて自習ができる環境ができた。

### 課題

別室登校生徒が増え、支援員だけで、落ち着いた環境を維持すること。

## 校内別室指導支援事業を活用した登校支援

### 不登校児童の状況

対象児童は集団における一斉指導や対人関係に不安を抱える状況であった。学校生活を送る時間は周囲の視線を気にすることなく、学習内容等を自己決定しながら過ごすことを望んでいた。

### 具体的な取組

#### ○児童の在校時間に合わせた開室

児童が登校する時刻から開室できるように支援員の勤務時間を調整した。また、土曜授業にも対応できる人材を雇用了。

#### ○児童が落ち着く環境の整備

同室を複数の児童が利用した際、集団や個別に学習や読書などができるように、机やパーティションを設けた。



#### ○当該児童による学校生活の決定

当該児童の担任が学習進度に合わせた学習計画を作成し、児童が取り組む範囲を決めたり、児童が休憩時間を設定したりして当該児童が一日の予定を立てて学校で過ごすことができるようにした。

#### ○タブレット端末を活用できる教室

教員が児童に学習課題を配信したり、当該児童が教員に学習した記録を報告したりして、一斉指導と同程度の学習を進めることができるようにした。

### 成果

当該児童が希望する学校生活の実現により、登校を前向きに考える姿を見ることができた。

### 課題

今後も継続的に校内別室指導支援員を配置することができること

## 校内別室指導支援員を活用した別室活用について

### 不登校生徒の状況

中学校3年生の対象生徒は、起立性調節障害の診断を受け、1年生2学期になってから登校できない状態だった。2年生から校内別室の利用を始める中で、学校にもなじみ、登校ペースが整ってきた。3年生となり、学校生活のリズムを整える中で、校内別室指導支援員との学びの機会が増え、登校意欲の向上が見られている。

### 具体的な取組

#### ○学習スペースを柔軟に選べる

パーティションで区切った個室での個別学習と、テーブルを使った小グループ学習が選べる。



#### ○学びたい内容を適宜提供

学びたい内容を校内別室指導支援員に伝え、教科教員が教材を提供する。タブレット端末なども活用している。



#### ○興味を引く「ミニ図書棚」の活用

ロッカースペースに関連書籍を陳列し、いつでも閲覧できる状況にする。



#### ○担任と別室指導支援員が情報共有

当該生徒の考えや今後の目標と、担任が期待することなどについて連携を図る。



### 成果

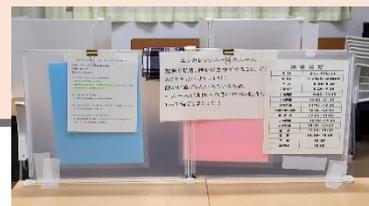
校内別室の運用が軌道に乗ったことで、教室に入れず登校しづらいと感じていた生徒が登校できるようになった。

校内別室指導支援員等と生徒が交流を図ることで、学習に向かう意欲が向上した。

### 課題

大学生の校内別室指導支援員は、支援時間が流動的になることや支援内容の充実を図ることが課題となった。

## 校内別室指導支援員の取組について



### 不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校では登校しぶりが見られたが、中学校に入学してから教室復帰をすることができていた。しかし、クラスメイトと円滑な関係を進めることが苦しくなり2学期から別室登校となった。別室では自分らしさを出すことができ、他学年の生徒とも人間関係を作った。しかし、そこでトラブルが生まれ校内別室がうるさくなったりするなどの状況も生まれた。

### 具体的な取組

#### ○校内体制の強化

4人の別室指導支援員が在籍しているために校内別室に通う生徒の情報共有が重要になる。鍵のかかる引き出しに個々の生徒の一日の取組や状況を伝える「共有ノート」を作成した。支援員同士はもちろんのこと、全教職員に情報共有している。

#### ○組織力の向上

校内別室が生徒にとって居心地がよくなり自分勝手な行動をする様子も見られるようになった。支援員から生徒情報の提供をもとに、二つの対応策①担任の面談②学習課題の提供の見直しを行ったことで改善が見られた。支援員と教員の更なる連携を通して組織力の向上を図った。

#### ○個々の不登校生徒への支援

「共有ノート」の活用により、生徒の情報共有が充実してきた。また、支援員が対応に慣れてきたことから、担任に話せないことも支援員を通して、生徒の実態をつかむことが可能になった。SC、SSWなどとの連携にもつながり、より充実した個々の支援になっている。

#### ○実践の成果についての普及・啓発

別室での取組の内容については、定期的実施される加配教員連絡会で紹介し、区内の学校への普及・啓発に努めている。校内別室指導支援員の自主的な取組が支援員の育成につながり、校内別室の整備に大きく関わっている。

### 成果

日頃の情報共有や「不登校対策委員会」を通して、支援員との情報共有が充実したことで、直接生徒と関わる支援員の育成につながり、校内体制の強化につながった。

### 課題

支援員複数年での継続した支援により、生徒との関係づくりを続けていくことが課題である。

## 校内別室指導支援員と教員が協力して展開する別室運営

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校から五月雨登校で、入学直後から欠席が目立った。中学校 1 年生では定期的な別室登校を目標にしていたが、調子が良い時には登校できるが、その後長期間欠席が続いてしまうという状況があった。学期ごとの面談で、別室登校のペースを一定にして長期間欠席が続かないようにするという目標を立てた。2 年生では毎日登校するようになっており、教室にも入れている。

### 具体的な取組

#### ○学習の補助

生徒の個人学習時間には、支援員とペアになって一緒にワークに取り組んでいる。数学と英語は学習進度に差が大きく、個別での学習補充が欠かせない。

#### ○登校記録の発信、支援記録の作成

生徒の通室状況を支援員がクラウドに投稿し、校内で居場所を把握するようにしている。また、生徒一人一人の活動内容を時間ごとに記録し、様子が担任に伝わるようにしている。

#### ○採用する支援員の工夫

別室指導支援員には、教職志望の大学生（数学科／養護）及び、退職教職員（音楽科／栄養士）を採用している。それぞれをペアで配置することにより、バランスの取れた関わりを意識している。

#### ○集団活動への参加

支援員はコミュニケーション活動と一緒に参加して、生徒同士の関わり方に注目したり、会話練習の場を提供したりしている。



### 成果

支援員を毎日複数人配置できるようになってからは、異年齢の生徒が同時に登校した場合でも余裕をもって対応できるようになった。また、イベント内容によって支援員の人数を柔軟に変えることで、日ごろ登校していない不登校生徒も招き、集団での音楽会や調理実習も行えるようになった。

### 課題

円滑な別室運営には、支援員との連携を行う教員の役割が必要である。また、継続した支援員の確保が課題である。

## 校内別室の活用について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校3年生であり、中学入学後から欠席が増え始め、1年生の2学期にはほとんど登校ができなくなった。不登校の要因は学習の遅れや生活リズムの崩れによるものだった。現在は週3日校内別室に登校し、別室で自習学習をした後給食を食べて下校している。今後登校日数を増やしていく予定である。

### 具体的な取組

#### ○校内別室指導支援員

別室を毎日8:30～3:30に開室し、大学生や地元のOB・OGの方々が日替わりで校内別室指導支援員として勤務している。常時1人の支援員が校内別室で当該生徒の支援を行っている。

#### ○登校連絡体制

当該生徒は、申請時に登校時間を当該生徒の希望で決定し、自習道具を持って直接校内別室に登校している。登校していない場合や早退などの場合は支援員より各家庭に連絡をする。今年度の校内別室利用は5人である。週3～5日のペースで利用している。登校カードを使って担任と校内別室の連携を行っている。

#### ○支援内容

自習学習の見守りのほか、3年生の学力テストの別室受験を実施している。また、百人一首や熟字カードゲームを使ったレクリエーションなどを行うことで支援員と生徒の交流を深めている。

給食は校内別室にて他の利用生徒と一緒に食べている。

#### ○登校支援等

校内別室指導支援員が、学校に入りづらい生徒を校門まで迎えに行ったり、話を聞いたりしている。

SC・SS  
Wも校内別室を中心に支援を行っている。



### 成果

校内別室指導支援員の配置が2年目になり、校内別室と担任・SCなどの連携がよくなり、当該生徒への支援方法を協議しやすくなった。また、受験対策などの指導にも取り組むことができた。

### 課題

校内別室の利用者に対する教職員の関わりを検討する必要がある。

## 校内別室指導支援員による支援について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、人間関係不振により昨年度後半から不登校になり、今年度は別室登校をしていた。校内別室指導支援員の支援により、教室復帰へのきっかけとすることができ、少しずつ教室で過ごす時間が増えてきている。

### 具体的な取組

#### ○別室での見守り

支援員が校内別室に常駐することで、必要な生徒の別室の利用ができ、いつでも開室しているという安心感を利用する生徒に与えることができた。別室での生徒とのやりとりから、教員では聞けなかった情報を得ることができた。

#### ○教室への付き添い

別室登校生徒が参加したい授業時には、支援員が教室まで付き添うことで、教室までのハードルを超えることができた。また、給食配膳や休み時間など利用生徒の希望に合わせて教室での参加を、サポートしている。

#### ○教員との共有

別室登校生徒の登校時間や登校時のやりとりを教員へ共有することで、生徒の様子を把握することができた。



#### ○教室での学習見守り

別室登校生徒が教室での授業参加をする際に、一緒に教室に入り、教室での授業の様子を見守ることで、教室での安心感を与えることができた。継続して見守りを行うことで、一人でも教室の授業に参加できるようになった。

### 成果

校内別室を開室するに当たって、支援員を配置することで教員の負担を軽減させつつも利用生徒の実態に合わせ、柔軟に対応することができた。支援員が常に別室にいて、生徒に安心感を与え、教室復帰へのチャレンジをサポートすることができた。

### 課題

- ・人材の確保
- ・学習支援のサポート方法
- ・教員との連携方法

## 校内別室指導支援員を活用した不登校支援について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、自身もうまく説明できない漠然とした不安感から教室に入れなくなった。複数ある校内別室を紹介すると、積極的に利用を希望し、校内別室指導支援員と植物や昆虫などの自然観察をして過ごすようになった。

### 具体的な取組

#### ○情報の共有

校内別室指導支援員は、次の情報を職員室内のホワイトボードに記入し、教員が校内別室の状況を把握できるようにしている。

- ・登下校時間
- ・どちらの別室か
- ・給食の要否
- ・給食の受け取り方

#### ○活動の見守り

校内別室指導支援員は、学習指導を直接行うのではなく、生徒の自学自習を見守ることを基本としている。

また、給食の受け取り方など、個々の事情や要望を的確に把握し、それぞれに応じた柔軟な対応により生徒の別室登校を支援している。

#### ○特別な活動への参加

別室利用生徒の体力低下を防ぐために実施している運動に校内別室指導支援員も参加し、別室とは違う活動を共に実施することで、相互理解を図り、人間関係を強化している。



#### ○別室の環境整備

校内別室指導支援員は、校内別室に関する生徒からの意見や要望を教員に伝達する。これにより、別室の環境をよりニーズに合ったものへと改善している。



### 成果

校内別室指導支援員の見守りにより、別室が利用生徒にとって安心して過ごすことができる居場所となっている。

昨年度別室を継続利用した生徒のうち6人が今年度教室復帰を果たしている。

### 課題

別室利用生徒に対して、学習への意識を向上できるような校内別室指導支援員の支援

## 登校日数・在校時間を少しでも増やす校内別室指導支援員の活用について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校入学時には、通常通り登校していたが、2学期以降は月数日の欠席と徐々に増え、3学期始業式翌日からは教室に入れられない状態となった。

保護者は別室でも登校させたいという意向で、対象生徒もそれに従っている様子が見受けられた。

### 具体的な取組

#### ○校内別室指導教室の配置の工夫

- ・昇降口から最も近く、職員室や保健室からも近い部屋を使用している。
- ・パーティションの設置など、室内の机の配置も工夫している。

#### ○校内別室指導支援員の勤務時間設定の工夫

- ・朝から昼休みまでの設定にすることで、当該生徒の生活リズムを保っている。
- ・勤務の曜日を固定することで、別室の仕組みの定着が図れている。

#### ○校内別室登校記録ファイルの活用

- ・当該生徒が1日1枚、その日の活動内容などを記録し、ファイリングしている。
- ・登校時と下校時に、教員が点検をすることで当該生徒との関わりを増やしている。

#### ○授業などへの参加の促進

- ・一人1台端末を活用した授業（5教科を中心に、道徳なども）のオンライン配信を実施している。
- ・授業に必要なプリントを事前に準備し、参加できるようにしている。



### 成果

支援開始前の1年生の3学期と、支援開始後の2年生の1学期では、朝から登校できる日数が平均して週1日ほど増加した。

### 課題

実技教科での実習などを含め、学習に対する支援体制を整備していく。

## 校内別室指導支援員の活用について

### 不登校児童の状況

対象児童は、高学年になって以降、学校を欠席することが多くなった。特別支援教室でのソーシャルスキルトレーニングやスクールソーシャルワーカーによる関係機関との連携など様々な手だてで登校支援を続けている。それらと併せて校内別室指導支援員による登校支援も開始した。

### 具体的な取組

#### ○安心できる環境でのコミュニケーションの継続

支援員が当該児童と良好で安心できる関係を築き、登校したい気持ちになるよう学校でコミュニケーションを取っている。

学習課題に取り組むこともあるが、無理強いせず居場所の確保を第一としている。

#### ○学校行事への関わり支援

支援員と共に学校行事に関わる取組をしている。音楽会の練習見学の付き添いや、楽器のパート練習を行い、部分的にでも行事に参加できるように支援している。



#### ○担任や特別支援担当との情報共有

支援員の活動の様子や当該児童の様子を、担任や特別支援コーディネーターに報告し、情報共有を図っている。様々な役割の教職員が連携、協働して当該児童の支援に当たっている。

#### ○不登校傾向が心配される児童への対応

当該児童以外の学校を休みがちな児童に対して、支援員は不登校傾向が強まった時に良好な関係を構築できるよう、様子を観察したり軽いコミュニケーションを取ったりしている。

### 成果

当該児童は、校内別室指導支援員の勤務日を楽しみにしており、登校のモチベーションとなっている。支援員の勤務日でない曜日は、毎日短時間であっても登校する習慣を維持している。

### 課題

登校の維持から、計画的な学習活動や教室への復帰へとステップアップすること。

## 校内別室における支援の充実

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校 4 年生頃から少しずつ欠席が増え始め、6 年生 3 学期はほぼ欠席となった。教育センターで学習や体験活動に取り組むことはできたが、登校にはなかなかつながらなかった。校内別室が完成してからは週 2、3 日登校し、給食を食べることができるようになった。現在も、当該生徒のペースで別室登校を継続している。

### 具体的な取組

#### ○公募による支援員の採用

校内別室に親しみやすい名前を付け、生徒たちが入りやすい環境づくりを行った。支援員はいずれも公募による採用であり、教育および不登校支援に関する知識を有している人材が携わっている。



#### ○個別に選択した学習支援

集団になじめず不登校だった生徒が、別室登校ができるようになってきている。別室では、オンライン配信授業や課題への取組など、個別に選択した学習をしており、支援員はアドバイスや日常の出来事の話し相手となり、他人との関わり方を学ぶ良い機会となっている。

#### ○生徒が落ち着ける場所の工夫

教室で学習していても、人間関係のトラブルや発達特性により落ち着くことを必要とした際には、一人で落ち着ける場所として、校内別室にテントを設置している。

誰にも見られずに一人になるために使う生徒もいる。



#### ○生徒自身が学習スペースを選択

校内別室には教室と同じような空間で学べるスペースと、個別で学習できるスペース、他の人たちの目が気になってしまったり、音が気になったりする生徒のための少し広めの個人スペースがあり、生徒自身で選択することができる。



### 成果

校内別室指導を開始してから、前年度ほぼ欠席だった生徒のうち約 1 割程度の生徒が校内別室の利用を始めている。今まで居場所がなかった生徒にとって、落ち着ける場所を提供できている。

### 課題

今後、利用する生徒の人数が増えてきた場合の場所の確保と校内別室から教室復帰までの支援が課題である。

## 校内別室指導支援員を活用した 支援の充実について



### 不登校生徒の状況

対象生徒は中学校 1 年生であり、4 月下旬の宿泊学習に欠席してから教室に入れない状態となった。理由は、対人恐怖であり、クラスメートに会うのが怖いとのことである。4 月下旬以降は、校内別室に 10 時ごろ登校し、給食後下校するという生活を続けており、その間は 1 学年の教員が支援に当たる体制を取ってきた。

### 具体的な取組

#### ○校内別室指導支援員との連携

2 学期以降、校内別室指導支援員が 1 人配置され、1 学年教員と連携して支援に当たるようになった。登校時には 1 学年の教員立ち会いのもと、その日の学習内容等について生徒と確認し、校内別室指導支援員が学習の見守りを行った。担任とは、対面のほか連絡帳で毎日やりとりし、つながりをもつようにした。

#### ○教育相談部会による情報共有

毎週、金曜日の時間割に教育相談部会を位置付け、当該生徒をはじめとする要支援生徒について、情報共有・対応策の検討を行った。SC や SSW、都の巡回心理士も出席し、専門的な見地からの意見をいただき、その内容について校内別室指導支援員とも後日共通理解を図った。

#### ○コミュニケーションスキルの向上

対人恐怖を軽減するため、通級による指導を 2 学期から開始した。週 1 回金曜日に巡回指導教員によるコミュニケーションスキル向上のための指導を受け、恐怖感や緊張感を抱かずに、他者と対話することができる技法や気持ちの在り方について理解を深めることができた。

#### ○学習習慣の確立

校内別室の過ごし方について、その日の目標を決めて主体的に学習に取り組むことを約束し、校内別室指導支援員がその学習をサポートした。歴史的分野の学習を中心に取り組み、定期考査で一定の結果を出すことで自己肯定感の高まりがみられた。

### 成果

主体的な学習の取組とコミュニケーションスキル向上の指導により、自分に自信がもてるようになり、週に 1 時間でも教室で授業を受けてみようと思えるようになった。実際、10 月以降は社会科の授業に参加することができるようになった。

### 課題

週 1 回の教室での授業参加を 1 日 1 回に増やしていくなどにより、段階的に別室で過ごす時間を減らしていくこと。

## 安心して過ごせる校内別室を目指して

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校2年生で、5月頃から欠席が増えた。大きな声や音が苦手なことから、在籍学級に通えなくなった。「登校はしたいが教室に入ることができない」という気持ちを抱えている。宿泊行事や職場体験などの行事には参加することができている。

### 具体的な取組

#### ○環境整備

当該生徒は、別室のカーテンによる仕切りで、一人で集中したり、気持ちを落ち着かせたりすることができるようにしている。



#### ○学習支援

当該生徒は、漢字や理科のワークに自学自習で取り組み、自分のペースで学習できている。

2学期の定期考査も受験でき、別室登校により学習に対するモチベーションを高めることにつながられている。

#### ○落ち着ける場所の確保

当該生徒は、大きな声や音が苦手な在籍学級に通えなくなったが、校内別室では静かな環境の中、落ちていて学習に取り組んでいる。

校内別室指導支援員との会話を楽しむ様子も見え、登校への動機にもなっている。

#### ○在籍学級とのつながり

担任が校内別室に学習課題を届けており、当該生徒と在籍学級との関係が途切れないようにしている。

それにより、宿泊行事や職場体験などの行事には参加できるなど成果が出ている。

### 成果

校内別室指導支援員の配置により、登校する機会が増え、定期考査や行事の際など、在籍学級に行くことができる場面も増えた。また、担任とのつながりをもつことができ、生活面や進路の面で相談できる機会が増えたことも成果である。

### 課題

別室登校できている生徒に、学習面でどのように力を付けさせるか、学校全体で考え、取り組んでいくことが今後の課題である。

## 校内別室指導支援員と協同した不登校支援について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、1年次の秋頃から欠席が続いていた。SC・支援員等、教員だけでなく複数の職員が時間をかけて関わりをもつことにより、精神的な安全を確保することができている。教室に行くという目標に向け、行動変容も見られる。

### 具体的な取組

#### ○安心して学習できる環境整備

校内別室では、個別で学習できる空間や共同学習ができる場を整備している。

自主学習中は集中できるよう仕切りのある奥を利用し、休み時間・給食時などは校内別室内で交流ができるよう手前のテーブルを使用した。



#### ○学習環境の整備

当該生徒が持参した学習教材を使用した自学自習を基本とし、希望者にはオンライン配信の授業を行っている。当該生徒自身は毎日一日の学習計画を立て、その日の感想を記入し、直接顔を見て担任と話すことに取り組んでいる。



#### ○支援員との連携

毎日変わる支援員同士も情報共有できるように日誌を作成し、日々の気付きや疑問、引き継ぎ事項を確認し生徒の変化に気付けるよう共有している。

生徒も見守られている安心感や信頼関係ができており、給食時や休み時間に笑顔で談笑する様子が見られている。

#### ○教職員での情報整備

校内別室実施要項の他に、支援員の役割や業務内容を明記したマニュアルを作成し教職員・支援員7人と同一の物を利用して情報共有を図っている。月1回の特別支援委員会での情報共有に加え、週1回以上(担任は毎日)の支援員の日誌の回覧を行い、別室を利用する生徒の様子について情報共有を行っている。

### 成果

9月から2か月校内別室を使用した生徒が1人教室復帰できている。生活習慣を取り戻す場としても活用できており、自分のペースで安心して取り組める場があるため、登校日数が増加し休み時間のクラスメイトとの交流や部活参加が増えている。

### 課題

支援員及び教職員が協力して生徒の支援計画を作成し、支援の統一化を図る。

## 校内別室指導支援員の取組について

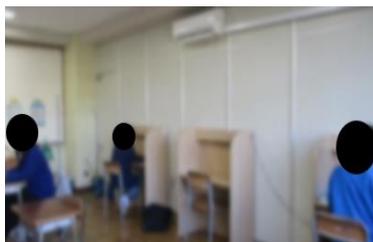
### 不登校生徒の状況

対象生徒は、昨年度の後半から不登校が続いていた。保護者との細やかな連携も必要な生徒であったため、安心できる場所として校内別室の利用を始めた。校内別室指導支援員による支援は、学習のサポートや参加可能な授業のサポート、話し相手等である。現在、登校する日数や時間を増やし、自分で決めた日は必ず登校するようになり、行事にも参加できている。

### 具体的な取組

#### ○学習活動の助言

校内別室指導支援員が別室登校している生徒の対応を行う。自習等の学習活動の助言をしたり、悩みを抱えている当該生徒の話し相手になったりすることで、当該生徒が学校に来たいと思える環境をつくっている。



#### ○生徒の孤独感の軽減

校内別室指導支援員が行事において、別室登校をしている生徒や、支援が必要な生徒の個別対応を行う。不登校生徒が校内別室で行事の見学を行うことや、大きな音が苦手な生徒が一時的に別室で休むことなど、細やかな対応を行うことで、生徒の孤立感を軽減させることができている。

#### ○気持ちを落ち着かせる

校内別室指導支援員が、精神的に不安定になった生徒等、一時的に校内別室に退避した際の対応を行う。教員の対応後、気持ちを落ち着けることや休養をとる生徒の見守りを行っている。落ち着きを取り戻したときの話し相手になることもある。これにより、教員との複数指導なども可能となる。

#### ○教室への付き添い

授業中の教室で、特別な教育的ニーズのある生徒のサポートを行う。授業についていけなかったり、学習を不安に思ったりしている生徒の支援を行うことにより、不登校につながる要因を取り除くことができている。また反対に、別室登校から教室に復帰する生徒に対しても適宜教室でサポートを行い、生徒の不安を解消する。

### 成果

校内別室指導支援員と一緒にいる時間が長い別室登校の生徒が心を開くようになり、登校する意欲が高まった。その結果、学校に来られなかった生徒の多くが、別室登校を続けられるようになった。

### 課題

同時に多くの生徒が別室登校をする際、人手が足りず、個別の対応を整備する必要がある。

## 校内別室指導支援員の活用について

### 不登校児童の状況

対象児童は、不登校が続いていたが、校内別室を利用して登校回数が増えてきた。校内別室に学級の友達が訪ねてきて、少しずつ教室参加もできるようになった。

### 具体的な取組

○教室と校内別室をオンラインでつなぐ  
教室と別室をタブレット端末でつなぎ、校内別室からオンラインで授業の様子を見ている。教室の様子を知ることができ、教室復帰や学習意欲の向上につながっている。状況によって、校内別室指導支援員が学習内容を支援している。

○別室で課題に取り組む  
校内別室で校内別室指導支援員と一緒に、担任や専科教員から提示された課題に取り組む。個別に分からないところを質問したり、展覧会に向けてじっくりと作品作りを行ったりした。



○行事に部分的にでも参加する  
校内別室指導支援員が、行事にも付き添うことで、行事の雰囲気味わうことができた。また、校内別室指導支援員と一緒に進行状況を確認して、徒競走や係活動等、可能なものには参加することができた。

○別室で児童同士の間関係を深める  
校内別室では数人の児童が過ごしている。校内別室指導支援員が介在することで、児童同士の関係性が深まった。小集団の活動で、人間関係を築くことへの気付きや自己肯定感の向上につなげていきたい。

### 成果

- ・当該児童の学校での滞在時間が長くなった。
- ・校内別室指導支援員により、丁寧で寄り添った対応ができ、当該児童の安心感につながった。
- ・児童や保護者が別室登校という選択肢ができて、教員も別室登校を勧めやすくなった。

### 課題

- ・個室ブースの確保
- ・個々の状況が違う児童たちが一緒に過ごしているため、校内別室での過ごし方の目標設定の難しさ

## 不登校生徒への支援について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、中学入学時には登校していたが、2学期の途中から欠席が目立つようになり、教室に入ることを拒むようになった。保護者は協力的で、学校とも連絡が取りやすい状況だったため、保護者と相談の上、別室登校を始めた。

### 具体的な取組

#### ○個別時間割の作成

学級担任と特別支援コーディネーターが当該生徒と話し合い、個別時間割を作成している。

当該生徒のその日の実態に応じて、時間を増やしたり減らしたりするなど、柔軟な対応をしている。

#### ○登校状況の把握

職員室に校内別室生徒用のホワイトボードを設置し、どの生徒がいつ在室しているのかが見えるようにしている。

担任が生徒に連絡するタイミングを把握できたり、学年の教員が出欠席の確認ができたりする等の利点がある。

#### ○校内別室指導支援員のサポート

校内別室指導支援員を計4人配置しており、本校では平日8:30~15:30の間、いつでも別室を利用できる体制になっている。対応できる時間や曜日が柔軟なため、当該生徒の希望した活動を取り入れやすくなっている。

#### ○個別ブース

周囲の視線を気にせず、個々のペースで学習を進めることができるように、仕切りで分けたブースを設けている。



### 成果

ホワイトボードの活用により、利用生徒との情報共有が可能となった。また、校内別室指導支援員の増員により、学年教員の負担が減少している。さらに、生徒の登校のタイミングも柔軟な対応が可能になったため、より充実した体制になっている。

### 課題

学校の規模に対して、別室が狭く、スペースがないため、今後、利用生徒が増えた場合の場所の確保が課題である。

## 校内別室の設置と校内別室指導支援員の取組について

### 不登校児童の状況

令和5年9月から、「友達がいない」、「体育着に着替えるのが嫌だ」等の理由で欠席が続いた。令和6年度から、校内別室が開始となり、遅刻はあるが欠席はほとんどなくなった。自閉症スペクトラム症の診断が出ている。



### 具体的な取組

#### ○別室の数と配置の工夫

保健室の近くに安心して過ごせる居場所として、校内別室を3部屋増設したことで、登校直後など当該児童が最もストレスを感じる時間帯を乗り切ることができるようになった。

教室に入れるまでの心の準備の場所があることで、自分の気持ちが整えられ授業へ参加することができた。

#### ○別室での学習の姿

登校した際に、自分で何をするかの計画を立て、支援員に伝えている。

調べ学習やドリル学習など、自分のペースで取り組み、分からないことや確認したいことなどを支援員に尋ねながら進めることができている。

学習できたことやがんばることができたことが自信につながっている。

#### ○支援員の関わり方の工夫

自分の話を聞いてくれる、親身になってくれる支援員がいることで、興味のあることや好きなことを話すことができ、人とつながること、コミュニケーションを取ることの楽しさを実感することができている。

支援員に歌やダンスを披露してくれることもある。

#### ○別室指導による児童の変容

登校への習慣ができ、生活リズムが整ってきたことで、学校行事への参加や友人との関わりが出てきている。

自分で一日の計画を立てる際に、めあてをもって生活できるようになった。

他の別室利用児童に前向きな言葉や励ましの言葉がかけられるようになった。

### 成果

令和6年1月から校内別室が増設され安心して登校できるようになった。9月からは支援員が配置され、給食を教室で食べ、教室で授業を受け、運動会などの行事にも参加できるようになった。

### 課題

家庭と連携し生活リズムを整え、寝不足や遅刻などを減らしていく。進学先への引き継ぎ、情報交換を行いスムーズな接続を計画的に行う。

## 校内別室と校内別室指導支援員の活用

### 不登校児童の状況

対象児童は、1 学期のうち、授業日の半分近くは遅刻した。2 学期に入ってから10、11 月と、各月とも出席日数が0 日となった。保護者は、学校の話題には不機嫌になることがある。塾には友達がいるので、毎日通っている。現在、「学校に行かなければ」という意思はもっているようで、まずは校内別室への登校を試みることとなった。

### 具体的な取組

#### ○校内別室の活用

職員室の隣に校内別室を設置し、校内別室指導支援員を配置する。隣の席とはパーティションで区切っており、落ち着いた環境で過ごすことができるようにしている。手前には、



パーティションのない座席も用意している。

#### ○校内別室指導支援員の配置

校内別室指導支援員は、校内別室に来た児童の学習を見守り、会話などで児童と関わる。学習指導ではなく、入室した児童が安心して過ごせる環境づくりを第一とし、一律の課題を設定するのではなく、利用する児童に合った活動を見守り、児童との信頼関係を築いていく。

#### ○心の安心を第一に

登校した児童の状態に合わせた過ごし方ができるように配慮している。プリントに取り組む場合もあれば、みんなと同じ時間にワークテストにチャレンジしたり、落ち着くまで指導員と話をしたりするなどして過ごし、リラックスした状態でいられるようにしている。

#### ○登校サポーターとの連携

校内別室指導員とは別に、保護者からの依頼を受けた場合には、登校時に付き添いが必要な児童を対象に、学校と家庭の支援員を配置している。

学校に足が向かない児童を励まし、自宅から学校までの通学路を同行し、校内別室までの登校へとつなげている。

### 成果

「教室には行けないけど、校内別室までならがんばって行けそう。」と言って、毎日ではないが、登校することができた。

「楽しく過ごせた」との発言もあり、登校への不安を少しやわらげることができた。

### 課題

別室の利用について、保護者の理解を得ること、学習の時間を確保していくこと

## 校内別室指導支援員の活用について

### 不登校児童の状況

対象児童は養育環境の中で満たされないと感じていることや友達とのトラブルにより居場所がないと感じ、登校日数が減った。当該児童のもつ特性により、うまくいかないことが多く不登校になった。校内別室指導支援員配置校により、「教室に行かなくても学習できる場がある」ことを当該児童の、保護者へ周知し登校することができた。

### 具体的な取組

#### ○校内別室の存在と役割の周知

当該児童も含め、不登校及び不登校傾向のある児童、保護者へ個別に別室の取組を説明した。

教室に行かなくても学びの場があるということを知り、安心して登校できる環境を整えた。

#### ○実際の活用

児童一人一人の状況に応じた学習環境を整えた。パーティションを活用した個別ブースと少し広いワークスペースの場を確保した。



#### ○ICTの活用

当該児童が取り組みやすい授業や学級会等の様子をタブレット端末で映し、オンラインで参加できるようにした。教室の様子を感じて、「自分なりの参加の方法」があることを知り、「参加できた。」という達成感や学級との一体感をもつことができた。

#### ○来室カードの活用

校内別室で学習している児童は「来室カード」を記入する。来室カードは、その日の活動内容や振り返りを書くことで自分を見つめ直す機会をつくっている。カードは担任とも共有することで、教室と校内別室との切れ目のない支援につながっている。

### 成果

校内別室の存在が周知された。学習する場が違っても教室の友達とも互いに認め合うことができた。授業にオンラインで参加できたことで、「教室へ行ってみよう」と思う気持ちや意欲も出てきて、少しずつ教室に戻るできるようになった。

### 課題

施設面で狭い教室での対応だったため、利用児童の増加による対応が課題である。

## 校内別室指導支援員の活用状況および対象児童の事例

### 不登校児童の状況

対象児童は、小学校 2 年生で、1 年生の 3 学期から不登校である兄の影響等もあり教室に入ることを拒み始める。兄がすでに校内別室を利用していたことから、不登校になる前に、校内別室の利用を開始した。その後、学習の一部に苦手意識があることや、教師の指示が理解しきれないときに、心理的な不安が生じることがあると分かってきた。

### 具体的な取組

#### ○学級との接点づくり

兄が母親同伴でないと登校できない状況があったため、当該児童もそれに同行して登校するところから始まった。

可能な範囲で母親から離し、支援員と過ごす時間を増やしていった。

下校時には担任にあいさつをしに行くようにし、学級の児童との接点もできるだけ途切れないよう配慮した。

#### ○別室登校で自信をつける

当該児童が 2 年生になり、新担任が登校を働きかけたが、当初はそれがプレッシャーとなってしまった。担任とは一度距離を置き、別室登校を続けながら少しずつ関係を取り戻すプロセスを踏んだ。

1 学期後半から、教科限定で母親や支援員と共に教室に入ることができるようになった。

#### ○行事参加をきっかけに目標設定

遠足への参加をきっかけに担任と相談し、目標を決め、少しずつ付き添いなしでの授業参加へのチャレンジを始めて、7～8 割程度教室に入ることができるようになった。

特定の学習内容など、当該児童が不安を感じる時間帯に、支援員、母親などが様子を見に行くようにしている。

#### ○支援員の役割

担任、副校長が保護者との間に入り、支援員の対応範囲、対応の体制、他の別室登校児童との兼ね合いをコーディネートした。支援員は、当該児童に対して、柔軟に対応した。



### 成果

担任の働きかけと、支援員の柔軟な対応、両者をコーディネートする担当や管理職の協力で、約 1 年間かけて教室への復帰ができつつある。また、当該児童の変容が、兄の登校にも良い影響を与えている。

### 課題

曜日や時間帯により、支援員が不在の時間帯があると受け入れに制限が出てしまうことが課題である。

## 校内別室の活用について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、以前は登校することがなかったが、自宅学習で出た疑問や質問を解決したいと思い、校内別室の利用を希望した。学習を続けながら、様々な場面で人との関わりを少しずつ増やそうとしている。

### 具体的な取組

#### ○入室面談の実施

入室の際に面談を行い、入室の目的を明確にした上で別室利用を推進している。面談は、管理職と担任、保護者、当該生徒が参加し、自分に合った登校時間を決め、校内別室での目的や目標の確認を行う。

#### ○毎日の計画を立て、実行する

校内別室支援員と一緒に登校日の計画を立て、学習に集中して取り組む環境を整えている。一日に取り組んだ内容を記録し、担任が毎日確認・コメント等を書いてフィードバックすることができている。

#### ○教室復帰に向けての交流等

教室復帰を目指し、クラスで話しやすい友人数人が校内別室の前まで運んできた給食を、受け取るようにしている。会話を通じて、教室の雰囲気を知ることができる良い機会となっている。

#### ○教員との交流

毎時間、校内別室の担当教員を配置しており、学習の様子を把握するよう努めている。また、手紙の受け渡しを行うなど、不安なことがあればいつでも相談ができる環境づくりを心がけている。

### 成果

これまで登校することができなかったが、校内別室の利用により、毎週決まった曜日に継続的に登校できるようになった。



### 課題

安心して登校し続けられる環境づくりが課題である。

## 個に応じた登校支援について

### 不登校児童の状況

対象児童は、連続した欠席は少ないが、遅刻することが多々ある。1 学期後半から徐々に学級への関わりに対する消極的な姿勢が目立つようになり、9 月頃から教室に入れない日が続いた。WISC 検査の結果、学習障害、コミュニケーション障害の診断が出ており、令和 6 年 7 月から特別支援教室を利用している。

### 具体的な取組

#### ○組織力の向上

毎週火曜日に生活指導連絡会を開催し、各担任から不登校（傾向）児童の状況、今後の対応などについて話し合う。

毎回スクールカウンセラーも同席し、情報提供や対応の仕方など専門的見地から教員に対してのアドバイスを受け入れられるようにしている。

#### ○校内別室における環境整備

いつでも安心して登校できるように校内別室をカーテンで仕切り、周囲から見られることなく、明るい環境で学習や相談ができるようにレイアウトなどを工夫している。



#### ○学級との関わりの維持

校内別室を利用する際の約束事として、『何時間目まで校内別室を利用するのか』を事前に担任と相談してから利用するため、約束した時間に教室に戻ることができた。

『振り返りカード』を活用し、めあて・学習内容・自己評価・感想を記入し、担任と共有できるようにしている。

#### ○教室復帰後の支援

担任・特別支援教室担当教員・校内別室指導支援員・スクールカウンセラーから、つらいときはいつでも相談できることを伝えている。教室復帰後は、管理職が、校内巡視、授業観察での当該児童の状況の把握、担任から直接話を聞く、週案等で当該児童の様子を理解などしている。

### 成果

令和 6 年度から校内別室指導支援員を配置し、校内体制と環境整備を推進したことにより、不登校（傾向）児童が、1 学期 5 人であったのに対し、2 学期は 3 人に減少した。日々の連絡・連携が成果につながっている。

### 課題

欠席等により、取り組んでいない学習面の支援が必要であり、多くの教職員等が見守る体制を整備し、関係機関との連携も強化していく。

## 校内別室指導支援員の活用について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、登校することはできていて、教室での集団生活に苦手意識をもつ生徒である。校内別室やSSW等との連携を通じ、別室登校や自学自習の取組は定着してきており、バーチャル・ラーニング・プラットフォームも活用している。校内別室指導支援員による励ましや承認が、当該生徒の意欲を高めている。

### 具体的な取組

#### ○生徒との信頼関係醸成

不登校対応巡回教員や担任等からの情報を踏まえ、生徒の話し相手になり、教職員やSC、SSW等とは異なるアプローチで不登校生徒と関わることができている。傾聴に努めることで、信頼関係を醸成し、別室登校する意義を向上させている。

#### ○生徒への学習支援・助言

不登校生徒の校内別室での学習を見守り、必要に応じて生徒に支援・助言を行い、生徒の求めに応じて相談等に応じて、生徒の自己肯定感や別室登校したことの満足感、次回の別室登校への期待を含めた学習意欲等を育むことができている。

#### ○生徒の見守りによる安心感の醸成

生徒にとって、校内別室指導支援員が迎えてくれること、見守ってくれることの安心感は、精神面での安定にもつながっている。

担任をはじめ教職員にとっても、支援の充実につながる存在である。



#### ○教職員等との連携

不登校対応巡回教員が勤務する毎週金曜日に情報共有と連携を図るとともに、不登校対応コーディネーターやSSW等と必要に応じて情報共有を行う。

在籍学級をはじめ各学級を訪問し、不登校生徒を取り巻く環境の情報収集を行い、教職員と連携している。

### 成果

不登校巡回教員による校内研修等を通じて、校内別室に対する共通理解が進み、活用が整ってきたことから、別室指導に関する一定の安心感が利用する生徒や教員に生まれてきている。今後の効果も期待できる。

### 課題

不登校生徒の別室登校が安定しない場合での更なる支援が課題である。

## 校内別室の活用と校内別室指導支援員と生徒の関わりについて



### 不登校生徒の状況

対象生徒は、コミュニケーションを取ることが苦手、クラスに仲の良い友人がいない、集団が苦手、クラスのザワザワしている雰囲気などが苦手等の様々な要因により気持ち不安定になり、教室にいられなくなった。校内別室を利用し、校内別室指導支援員のサポートのもと、様々な活動をしながら教室への復帰を目指している。

### 具体的な取組

#### ○登下校時の職員室への挨拶

当該生徒は、登校状況を教員が把握するため、登下校時に職員室に挨拶をするようにしている。挨拶を受けた教員は、職員室掲示の「校内別室利用一覧表」に登下校時間や給食の有無等を記載する。別室の使い方や別室でできる活動も細かく定めている。支援員は、活動内容や様子を「活動記録」に記し、個別ファイルに閉じている。

#### ○支援員の関わり

支援員が毎日校内別室に在室している。活動の見守りや支援（一緒に学習、小物作り、折り紙、一緒に給食を食べて会話をする等）をし、過ごしやすい空間をつくらせている。教室へ行ったりクラスメイトと交流したりすることができるよう、教室に給食や配布物を取りに行くことや行事への参加等の声かけ、付き添いもしている。

#### ○個別支援計画

個別支援計画（本人の様子・願い・不登校のきっかけ、保護者の様子・願い、外部機関との連携、短期・中長期支援計画、登校状況）を担当と不登校対応コーディネーターで作成し、教員、校内別室指導支援員、不登校対応巡回教員、SC、SSWと内容を共有し、短期・中長期支援計画に沿って支援に当たっている。

#### ○SC、SSWとの連携

担任は定期的に保護者と連絡を取り、家庭での様子を聞いたり、別室での様子を伝えたりしている。SCが定期的に面談を実施し、本人の思い・不安等を確認している。SSWが別室に定期的に訪れ、生徒の様子を観察したり声かけをしたりしている。できる限り多くの人とコミュニケーションが取れるように、会話の機会をつくらせている。

### 成果

別室登校を開始してからほぼ毎日、校内別室へ登校できている。別室登校から教室復帰ができた生徒は、1日1、2時間程度校内別室を利用して教室に戻るなど校内別室を効果的に利用することができており、登校することが継続できている。

### 課題

別室登校から次のステップへ進むこと、校内別室での活動に対する意欲が低いことなど、別室登校が継続できず、欠席が続く生徒がいる。

校内別室登校を始めたことで登校への抵抗感が減り、登校日数が増えた

### 不登校生徒の状況

対象生徒は中学校2年生である。1年生の大型連休明けの5月上旬から不登校となった。勉強熱心で真面目ではあるが、集団活動にうまく適応できなかったことが原因である。担任と相談し、2学期から別室登校を試してみるようになった。現在は週2、3日ほど別室登校をしている。

### 具体的な取組

#### ○校内別室での過ごし方の明確化

別室登校を開始する前に、担任と当該生徒、保護者とで活動内容を確認する。当該生徒は、自宅から持ってきたワークブックに取り組み、漢検等の受検を目標として自習している。

別室登校支援員も、自習環境を整え、学習補助を行っている。

#### ○生徒、担任、支援員の連携

生徒日誌、支援員日誌を担任と共有することで、当該生徒の状況を把握した上で声かけや保護者面談に生かしている。



#### ○見通しをもった学校生活への適応

別室にも毎週の時間割と月別行事予定を準備し学校生活の見通しをもたせている。次の登校日の予定の確認も支援員に依頼している。

授業時間を確認し、教室に行ったり、行事を確認して登校時間を変更したりしている生徒もいる。

#### ○他生徒との交流機会の場の提供

休憩時間の息抜きや、給食時間を別室利用生徒と共にしている。

当該生徒は、教室や教育支援センターへは行っていないため、別室登校の時間を通して他の生徒とのコミュニケーションを取っている。

### 成果

週に1、2日、1時間程度の登校から試行的に始めたが、自分のペースで学習したり、リラックスしながら給食を食べたりすることで、現在は週2、3日、1日3時間程度在室するなど、学校との関わりが増えてきている。緊張が少しほぐれ、表情が明るくなった。

### 課題

校内別室指導支援員を含めた校内体制の整備することや、校内別室の利用目的について関係者が共通認識できるようにすることが課題である。

## 校内別室の活用について

### 不登校児童の状況

対象児童は、対人コミュニケーションや学習に困難さを抱えている。友人関係のトラブルをきっかけに不登校になった。家庭との連携が難しく、生活や学習環境が整えられていない。

### 具体的な取組

#### ○校内の支援体制の確立

特別支援委員会で児童の支援方針を検討した。担任に限らず、校内全ての教職員が関わりながら登校を支援している。

#### ○安心して過ごせる居場所づくり

個別学習ができる部屋を設定した。学年にとらわれずに必要な学習が自分のペースで進められるスペース（写真 1）と、教職員と話したり、給食を食べたりできるスペース（写真 2）を確保している。



←写真 1



写真 2 →

#### ○不登校の未然防止

登校を渋る傾向のある児童や学校生活に困り感を抱える児童に対して、不登校になる前に児童の状況や保護者の捉え方、学校でできる支援方法について校内委員会で検討し、必要に応じて校内別室での学習を提案する。

#### ○校内別室指導支援員の配置

学習課題の準備や担任や学級との連絡役などを担い、登校した児童の学習の見守りを行っている。また、集団参加する際にも児童の不安に寄り添いながら適宜サポートをしている。

### 成果

校内別室が集団や学習に不安を抱える児童にとっての居場所となっている。

児童の健康観察をする場でもあり、給食を提供することもできている。

### 課題

対応する職員が不足していて、登校できている児童の中にも別室を希望する児童がいるため、校内体制の整備が必要である。

## 校内別室指導支援員の活用について

### 不登校児童の状況

小学校2年生で昨年度から、校内別室を利用している。教室でみんなと活動することに苦手意識をもっていて、1学期は校内別室で過ごすことが多かった。しかし、行事や学習において、担任や学年の児童と関わる場面を多くもてるようにすることで、自信をもち、2学期からはほとんど教室にいられるようになった。

### 具体的な取組

#### ○担任との関わり方

当該児童は、支援員と一緒に毎朝担任へ挨拶をし、その日のやることを確認した。その日に終了したものについても担任へ提出し、関わりを確実にもてるようにした。

担任も、こまめに励まし、当該児童が自信を持てるようにした。

#### ○休み時間について

休み時間には、仲の良い児童に遊びを誘いに行くよう促し、一緒に活動できる場面も増えた。



#### ○学習・個別最適な学び

一緒に学習できるよう、在籍学級前の廊下に机を用意し、授業に参加し、少しずつ教室に入れるよう促した。

1年間の遅れた部分については、保護者と連携し、対応することで、少しずつ遅れを取り戻すことができた。

#### ○別室があるという安心感

2学期に入り、どうしても教室では授業を受けられない場面が見られた。その際は、担任と相談をし、校内別室を利用した。校内別室があるという安心感から、登校しぶりもなくなった。

### 成果

組織的に対応したことで、登校を渋ることなく教室へ登校できるようになった。

個別最適な学びを実現し、児童の自信を付けることができた。

別室指導の安心感が、児童の心の安定につながった。

### 課題

別室の生徒を教室に付き添う際、支援員が1人しかいない場合、対応が難しいこと、また、教職を志す学生や、児童支援に関心のある方などによる支援員の確保が課題である。

## 校内別室における支援について



### 不登校児童の状況

当該児童は、小学校6年生である。進級した時は通常通り登校していたが、欠席が続いたことにより、教室に入るきっかけを失い、教室に入れなくなった。

### 具体的な取組

#### ○個別学習の時間の確保

当該児童が持参した課題を中心に取り組むようにしている。

家庭では、思春期のため、当該児童と保護者の意思疎通がうまくいっていない。学校には、落ち着いて過ごしたり、学習に集中できたりする環境がある。

#### ○校内別室の活用

個別の支援では、校内別室指導支援員と関わり、コミュニケーション能力の向上を図り、課題に取り組んでいる。

担任と当該児童で、校内別室に滞在する時間や課題を決めて校内別室を利用し、利用後には教室に戻るという約束をしている。

#### ○学級・学年との関わりの維持

学級とのつながりが閉ざされないように、学級の児童が校内別室まで給食を運んだり、休み時間に訪れたりするようにしている。

校外学習等がある時には、行事への参加を促している。

#### ○支援員の特技の活用

図画工作が得意な支援員であるため、簡単なものづくり等を支援員と一緒にやっている。

校内別室内の飾り等、児童が入りやすい環境整備を行っている。

### 成果

支援員との関わりを重ねながら、児童理解とコミュニケーション能力の向上を図ることができた。

課題や時間等、自己決定する機会を作ることで、少しずつ約束が守れるようになってきた。

社会科見学には参加することができた。

### 課題

今後、別室の運営について、学級とのつながりや校内別室指導支援員との信頼関係を構築し、多くの教職員や専門職で見守る体制を築いていく。

## 不登校生徒に対する教育相談の取組について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の 2 学期頃から、仲間との関わりが難しくなり、学校行事の取組に参加することや、集団で活動することができなくなった。1 年生では不登校の状態が続いたが、区の外部機関での支援を通して、徐々に前向きな気持ちが芽生え、2 年生の 2 学期からの校内別室での支援をきっかけにして登校できるようになっ

### 具体的な取組

#### ○個別支援計画

不登校対応巡回教員と連携して個別の支援計画を立て、長期的・短期的な手だてを明確にした。校内別室指導支援での生活の状況や、一人一人の今後の生活について SC や SSW ともつなげながら、定期的に部会を開催し、対応を検討した。不登校生徒に対しては、部会で別の枠組みを設け、状況や変容を確認し、誰一人取り残さない教育相談の実現を目指して、対応を検討した。

#### ○活動報告及び業務報告

校内別室指導支援員には生徒一人一人の活動報告と業務報告を作成させ、生徒の実態把握と業務の管理を徹底し、毎回、生徒の報告を担当や学年教員に常態化させた。不登校対策委員会でも共有し、課題や改善点を迅速に捉え、保護者に連絡が取れるようにしている。



#### ○組織体制

特別支援や配慮が必要な生徒に対して、運営委員会、特別支援委員会、いじめ防止対策委員会、教育相談部会等、対象生徒を明確にした。問題行動や不登校・いじめ防止対応、特別支援対応など、それぞれの専門性を活用して生徒対応できる組織体制を構築した。

#### ○大学生支援員

教育学や心理学を学ぶ大学生、教職を目指す教育実習経験者、教職経験者等、様々な立場の別室指導支援員を配置した。生徒は関わりを通して対応力を身に付け、相手のことを考えて行動したり、自分自身の特性や卒業後の進路について前向きに考えたりすることができるようになった。

### 成果

当該生徒は、登校する機会や、教員との関わりが増え、学校生活や自分自身について前向きに考える機会が増えた。また、一人一人の対応を考える組織体制が構築され、不登校生徒の活動できる環境を設定し、他者とのつながりをもてるようになった。

### 課題

支援員の配置や場所の確保が不十分であり、教員の負担になったり、集中できる環境が提供できなかったりするときがある。

## 校内別室指導支援について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の半ばから不登校傾向となり、3 学期はほぼ登校できなかった。2 年生は別室登校を始めた。現在は、ほぼ毎日、校内別室に登校し、自分の関心が高い教科の授業にも参加することができている。

### 具体的な取組

#### ○ICT を利用した出欠確認

職員室に寄らずに、校内別室教室にそのまま行くことを許可している。そのため、生徒が来室したら ICT を活用し、登下校の時間を全職員で共有できるようにした。また、校内別室から授業に出る時や校内別室に戻ってきた時には支援員から連絡があり、校内での生徒の所在が分かるようにしている。

#### ○本人理解と目標設定

校内別室を利用するに当たり、生徒・保護者・担任・支援員で四者面談を行った。生徒・保護者とともに校内別室利用での目標を立てた。当該生徒に合った目標を四者で共有することで継続した登校ができている。

#### ○授業の配信

教室での授業を配信し、校内別室で視聴することができるようにした。操作は支援員が行っている。

#### ○学習環境の整備

授業配信を視聴したり、学習したりするスペースとリラックスするスペースに分けている。基本的には授業時間中は学習を行い、休み時間や給食は支援員と校内別室を利用している生徒同士で過ごしている。



### 成果

当該生徒は、校内別室を利用する際に面談を行い、設定した目標を支援員にも共有している。支援員の声かけもあり、一日中別室で過ごすのではなく、授業も参加できるようになった。また、授業に参加できない生徒が不登校にならずに、学級や学校と関わりをもつ場となっている。

### 課題

支援員が急遽休んだ際の校内体制を整えるなど、校内別室と利用生徒の担任や他の教員との連携を更に進めていく必要がある。

## 校内別室指導支援員の活用について

### 不登校児童の状況

対象児童は、3年生から不登校傾向が出始め、4年生では登校することはほとんどなかった。5年生になり週1回程度放課後に担任と話をするようになったが、日中の登校はできていなかった。友達を含め他者との関わりに対して強い不安感を抱えている。

### 具体的な取組

#### ○校内での居場所づくり

教職員や校内別室指導支援員の校内別室対応シフトを作成し、当該児童の登校時刻に対応できる場所をつくった。

校内別室指導支援員への情報共有を行うとともに、当該児童が前向きに取り組める教材を用意し、当該児童の意思を尊重して過ごせるようにした。

#### ○校内別室での人間関係形成

校内別室指導支援員、特別支援教育専門員、巡回指導教員や空き教員が校内別室にて関わり、関係を築けるようにした。

給食の時間など、校内別室を利用する他児童と関わる時間を設け、少しずつ児童同士の関係も築けるようにした。



#### ○学級の友達との関わり維持

学級の児童に校内別室まで給食を運んでもらうことで、同学年の友達との触れ合いが生まれた。

学級での授業内容や校外学習について伝え、無理をしない範囲での参加を促すようにした。

#### ○学習の意欲向上への支援○

担任と放課後にコミュニケーションを図る場を設け、学級の学習の様子や当該児童が取り組みそうな内容について説明し、校内別室でも学習を取り組めるように支援した。校内別室において一日の中で、運動と学習をどちらも取り組めるよう当該児童と相談しながら過ごした。

### 成果

校内別室の支援開始前は、週1日くらいの登校頻度で、交流も担任だけの状態がほとんどであったが、支援開始後は、週に3、4日登校できることが多くなり、複数の教員とも関われるようになった。自ら教職員へコミュニケーションを図ることが増え、表情が豊かになった。

### 課題

校内別室指導支援員不在の時でも、校内別室を開室できる環境の整備が必要である。

## 校内別室指導支援員の配置

### 不登校生徒の状況

保護者の無関心によって学校との関わりが薄れ、生徒の登校にも無関心になっている。その結果、生徒自信も学校から足が遠のき、欠席日数が増えている。

### 具体的な取組

#### ○タブレットを活用した生徒へのコミュニケーション

不登校の生徒に対して、一人1台端末を活用し、生徒とコミュニケーションを取り、登校への意欲を向上できるようにしている。

#### ○個別の学習支援

生徒一人一人の学習スペースや理解度に合わせた個別学習ができるスペースを設置し、校内別室支援員による学習の見守りを実施している。

#### ○ソーシャルスキルトレーニング

生徒がコミュニケーションスキルの向上を図るため、他の生徒や校内別室支援員と日常的な会話を増やすことによりコミュニケーション力を向上させ、学習意欲や登校意欲を向上させる。

#### ○SCとの連携

登校支援員は、活動を通じて得た情報を教職員やSCと共有し、専門的な立場から助言を受ける。これにより、生徒一人一人の状況に合わせた見守りを行っている。

### 成果

別室支援員と当該生徒が、信頼関係を築くことができ、安心して登校できるようになり、登校日数が増えた。



### 課題

校内別室における一人一人のニーズに合わせた個別支援の実現を図ること。